

「鳴尾義民とその時代」 ——天正北郷樋事件と追悼活動

鳴尾北郷義民追悼会世話人代表 田 中 秀 哉

1. はじめに

私たちが住むこの西宮には、一般的に「鳴尾義民」と称される、安土桃山時代に起こった大きな水争い事件が伝えられている。

田畑の灌漑には縦横に巡らした水路が必要で、水路を懸命に整備しても日照りが長く続くと、しばしば農民の生死をかけた田畑の水争いが起きる。砂地の多いここ鳴尾地区にとって、水はことのほか重要で、その水争いの中で、特に厳しかったのが、天正19年(1591年)に発生した、「天正北郷樋事件」と呼ばれる鳴尾と瓦林の水争い。他に「北郷開樋事件」とも呼ばれている。

では「鳴尾義民」とはなんなのか。ひとことで定義すると「天正北郷樋事件の際、自ら犠牲となって、鳴尾村を救った25人の義民」のことを指す(西宮・浄願寺碑による)(図1)。

本稿ではこの事件の地理的、歴史的背景と、現在に至る「鳴尾義民」の追悼について考えてみたいと思う。



図1 浄願寺「北郷開樋殉難者之碑」

2. 鳴尾

「鳴尾」とは「西宮市の南東部に位置し、武庫川とかつての分流・枝川(甲子園筋)・申川の三角州上の地域」を指す(ウキペディア)。

この鳴尾エリアは土地としては比較的新しく、といっても、この土地に人々が住み始めたのは西暦200年ごろには確認されている。海岸線は今よりかなり北方で、武庫川の河口はJR甲子園口より山手にあったとされる。三角州にあるため砂地であり、また様々な歴史書本や和歌集にも「なるを」の地名はよく登場する。古くから松の景勝地と知られ、海上交通の目印として「鳴尾の松」、陸上交通のポイントとして、この「鳴尾」は定着していたものと推察されている。東側を流れる武庫川は大きく流れを変える「荒れ川」と呼ばれたようで、有史以来、たびたび洪水を起こしており、沿岸各地に多大な被害を与えている。

室町時代の弘治3年(1557年)、武庫川が決壊し旧・枝川が分流、さらに江戸時代の元文5年(1740年)の水害で旧・枝川から申川が分流し、ほぼ現況に固定されたとされる。

当時の鳴尾地区は周りを囲まれた馬蹄型の内側が鳴尾村となり、川が村境で隣村とは分離されていた。また、これらの川は平地より高い位置を川が流れる「天井川」であり、その堤には松の老木がぎっしりと植えられていたと聞く。雨が降ると水は流れるが、日照りが続くと干上がり、干ばつに弱いエリアと推察されている。そのため対策として村内各地に貯水池を備えていた。

ちなみに、この旧・枝川と申川が廃川となり、この跡地を阪神電鉄が買い取り、売却益が武庫川の改修工事に当てられていた。この2つの川の分岐点が今の甲子園球場の南側あたりで、旧枝川の跡が今の甲子園筋となる。

3. 安土桃山時代の「鳴尾」

鳴尾村は天正の初め（1573年～）から豊臣秀吉の直領とされていた。記録では天正10年（1582年）建部高光が郡代、天正12年（1584年）に同氏が尼崎郡代へと移動、天正13年（1585年）に佐々氏（佐々長治の嫡男、孫十郎政治）が鳴尾の領主となる。

当時の豊臣政権下では社会構造の整備が進んでおり、統一国家として様々な施策が執られている。

テーマのひとつ「天正北郷樋事件」に関係するものとしては「秀吉の刀狩り」と「秀吉の喧嘩停止令」が挙げられる。

「刀狩り」とは一般的には武士以外の僧侶や農民などに武器の所有を放棄させた政策のことを言い、刀狩政策は歴代様々な領主が行ってきたが、特に有名なのが、この秀吉の「刀狩り」。これにより、全国単位で兵農分離が進んだとされている。

中世当時、成人男性は帯刀が一般的で、農民は帯刀権（刀を帯する権利）を持っていた。刀狩りについての昨今の研究では政策の主目的が一揆（盟約による政治共同体）の防止であったとされる。当時の百姓身分の自治組織である「惣村＝惣」は膨大な武器を所有しており、相互に「一揆」の盟約を結んで団結し、領主の支配に対して抵抗力を持っていた。

また、実際には害獣駆除や祭祀に用いる武器の所有は許可されており、村中には武器が留保され、武力騒乱の可能性は内在したままで、実際は近隣間の水利・里山の利権など、ささいなトラブルでさえ、暴力によって解決される傾向にあった。

「秀吉の喧嘩停止令」は、詳細は不明だが、文字通り、私闘を禁止したもので、それまで判例という形で法令は存在していたようだが、記録に残る判例が天正15年（1587年）の春に見られる。

この2点から推察されることは、それまで農民（村落単位の集団など）は武器を所持しており、問題解決の手段として武器を使用した暴力による解決を図っていたということがあげられる。

天正19年の天正北郷樋事件＝鳴尾義民の事件は、そのような状況下で起こった。

4. 「天正北郷樋事件」

現在、史料的には天正19年が碑文等に刻まれ、あらましが語られているが、一部の碑には天正13年（1585年）と刻まれているものもあり、この6年間のタイムラグが何を意味するものか、少し考えてみる必要がある。

この天正13年は北郷の樋改修を鳴尾側から瓦林側に申し入れた、いわゆる水論開始の年であっ

て、この天正 13 年は鳴尾の先人にとって忘れることのできない年であり、顕彰碑に刻み込んだものと推察される（図 2）。

弘治 3 年（1557 年）に武庫川から旧枝川が分流し、その枝川が通過する瓦林村では村を水害から守るため、堤防を築いた。下流の鳴尾村では武庫川の伏流水などを水源とした灌漑用水路を整備していたが、築堤で大切な水路を遮断された。枝川の川底に樋を設置するなど、両村の利害を調整していたが、簡単な樋では梅雨時の大雨の度に破損するなど、抜本的な解決には至っていなかった。これが天正 13 年のこと。元々旱魃に、特に弱いエリアであった鳴尾は天正 17 年・18・19 年の 3 年間の大旱魃に襲われ、中でも 19 年は特にひどいものであったとされている。

そこで鳴尾村は瓦林村に対して鳴尾の窮状を訴え、水の半分を鳴尾へ流してくれるように嘆願するも叶わず、万策尽きた形になった。そこで最後の手段として、下瓦林の用水(新川)から水を盗むことを申し合わせ、6 年間の準備を整え、現在の北郷公園（甲子園三番町）の所から、枝川の川底の下にトンネルを掘り、4 斗樽の底を抜いたものを並べて水を引き入れることに成功した。

だが、もちろん、ただで済む訳がなく、瓦林側は実力阻止に出て、これが発端となり、近隣を巻き込んで大争乱に至った。天正 13 年以来の遺恨が暴発した形となった。

一説によれば、瓦林村の死者 60 名に対し、鳴尾村はひとりもなく、その代わり負傷者が多数出た。この争いは以前から鳴尾村に同情し義憤を感じていた、大庄村（尼崎市大庄地区）の農民やその北に居た福原弥兵衛という者が一族を率いて鳴尾村に加勢したとの話もある。

この騒動は早速、豊臣政権下の大坂奉行の許に訴えられた。訴えを受けた大坂奉行の前田玄以、長束正家、増田長盛ら、奉行衆らが両村に出頭を命じ事情聴取、結果、鳴尾村の言い分が通り、用水を取ることが認められた。

現在、「北郷開樋殉難者之碑」がある浄願寺（六番町）だが、事件当時、浄庵坊が鳴尾村の惣主であり、両村の調整に奔走していた。もちろん大阪での事情聴取にも参加、鳴尾村側の弁明にも努めている。

両村民は乱闘は天下に騒乱を引き起こすことになるかと厳しくとがめられ、遂に鳴尾側 25 名、瓦林側 26 名が大阪で処刑された。

裁定の結果は鳴尾側の勝訴の形になったが、これは勝ち負け、正しさの問題ではなく、農民にとって、いかに水が大切か、また、武庫川の水害被害が恐ろしいものを物語ったものとみれる。

評定にあたった片桐且元の話が鳴尾村に伝わる。

自首してきた村人に対し、且元が「水が欲しいか、命が欲しいと」と尋ねた所、村人は迷わず「水が欲しい」と言い切った。そこで、且元が「(トンネル作りに使った) 樽の個数と同数の者を死刑にするが、樽の数は何個か」聞いた。村民が「20 とちょっとつながりました」と答えると、且元は「よし 25 人打首だ」と裁定を下した。本当は樽を 100 以上使わなくては届くはずはなかったが、且元はこれを承知で 25 という数を決めたといわれる。



図 2 ハツ松公園「義民顕彰碑」
北郷開樋殉難者之碑

天正 20 年（1592 年）10 月 12 日に刑が執行。なお、この騒動のことは奈良にも伝わり、興福寺の記録には処刑人数まで記載されている。

この事件以来、昭和 17 年（1942 年）まで、毎年 6 月に鳴尾村は用水供給の礼として酒樽と浜で獲れた酒肴（タコ）や貝、魚を添えて瓦林村に贈るという儀礼が続いていた。こうしてできた樋を北郷樋といい、のちの人々は、この村民たちの勇気ある行動をたたえ、昭和 18 年（1943 年）、もとの樋があった近く（現在の北郷公園）に石碑を建てた（図 3）。

なお、瓦林村誌には「以前より北郷樋をめぐって、幾回も争議があり、遂に天正 19 年に大事になった」と記述されていると聞く。



図 3 北郷公園「義民碑」

5. 鳴尾村の消滅

明治維新後、近代国家へと歩みを進めた日本は、ここ鳴尾でも新たな産業が興り、地域の姿を変えてきた。鳴尾では、昭和期に入ってから近隣集落と合併を視野に入れた話し合い、意見交換があったと伝えられている。

戦後の町村合併の流れの中、西宮市から鳴尾村に正式に合併の申し入れがあったのは昭和 21 年（1946 年）10 月 14 日。単独市化、阪神市構想など様々な村の在り方を模索するが、昭和 25 年（1950 年）のジェーン台風被害の村財政への影響、戦後復興計画の進捗状況を鑑み、昭和 26 年（1952 年）1 月 9 日に合併提案を受け入れ、以降、村内の至る所で会合が開かれた。また、昭和 26 年 2 月 13 日には尼崎市からも合併の提案があり、鳴尾村は両市に対して合併条件を提示。3 月 13 日を投票日とする村民投票が行われ、結果、西宮市との合併が決定した。

3 月 14 日には兵庫県知事に対して西宮市長・鳴尾村長の連名で編入申し入れ書が提出された。

この申し入れには合併条件が付帯されており、「第八、その他の事項」の「6」に「北郷義民の法要行事を継続実施すること」とあり、このことを見ても、いかに鳴尾村民が鳴尾北郷義民の存在を重要視していたのか、よくわかる。

6. 追悼会継続の危機

西宮市と鳴尾村の合併に伴い、鳴尾義民の法要行事は西宮市が主催者となって行われていた。いつからか、西宮市が主催者ではなく、「補助金」支出で法要をサポート、主催は別という形になった様だが、詳細は確認できない。確認の取れている限りでは、昭和 61 年（1986 年）には「補助金」が出ている。自治会などが主催していたとの確認は取れず、「有志の会」主催となってもものと推察されている。これが後の「鳴尾北郷義民追悼会」の源流になっている。

西宮市は平成 17 年（2005 年）2 月に、赤字再建団体への転落を危惧し、財政の危機的状況に対応するために、「第 3 次西宮市行財政改善実施計画」を策定する。

元々、西宮市の財政状況は豊かなものではなく、財政改善に取り組んでいたが、そこに、平成7年(1995年)の阪神淡路大震災での復興費用・被害対応費が重なり、財政を圧迫していた。この中で、補助金支出の見直しが図られ、この「鳴尾義民法要」への補助金が廃止となった。

西宮市議会で、この「鳴尾義民」の話がとりあげられたのは、議事録データベースをワード検索した限りでは平成30年(2018年)9月10日の第15回定例会で、当時の中川つねお議員の教育委員会、産業文化局への質問。

教育委員会へは、教育現場での「鳴尾義民」の認知度アップ、産業文化局へは「補助金」廃止が質問の焦点となった。

実は、これは、追悼会初代代表世話人の喜田^{ゆきとし}佑敬元市議員が追悼会存続に向け、議事録に残すことを目指したもの。

質問のポイントは「なぜ、補助金が廃止となったのか」。

市は「財政面の視点だけでなく、必要性、有効性の等の補助金支出の意義も考慮した」と答弁。

しかし、その検討会では昭和26年の合併条件、「鳴尾義民」がなぜ、これほどまでに旧村民の心にあるかを理解していない委員が多数だった点が質疑の中で明らかになった。

また、認知向上、学校教育現場での取り組みについても、決して満足いくものではなかった。副読本の作成や紹介ビデオの制作を市当局はあげているが、現場での取り組みは希薄で、近隣学校でも、教員、事務員ですら「鳴尾義民」の言葉は浸透していない。

以降、状況は変わっていない。

しかし、この「鳴尾義民」の歴史的価値を認め、追悼会存続に向けて尽くしている市職員も多いと記述しておく。

この補助金廃止決定後、喜田氏は追悼会存続に向け、奔走し、地域の有志、鳴尾水利組合、鳴尾区有財産管理委員会、鳴尾会などの支援を取り付け、現在に至っている。

7. おわりに

幾度となく、存続の危機に陥った追悼会であるが、その都度、地域住民有志、各機関の支援のもとに現在も毎年法要が執り行われている。が、鳴尾エリアにも新しい住民が多く居住し、時代と共に、その認知度が希薄になる傾向を示している。

また、「追悼会」組織も高齢化の波に糾えず、世話人も減少の傾向にある。しかし、既述の通り、会の目的は「鳴尾北郷義民の霊を供養すると共に、後世に末長く伝承し、地域の発展を目指す」ことであり、会の使命として、その「鳴尾義民」の功績を残していかななくてはならないと、もっと「鳴尾義民」の話をお伝えし、その偉業を皆さんに知って頂くためメンバー一同活動している。

「毎年4月12日に浄願寺で追悼会を挙行しています。オープンな会です。皆様のご参列をお待ちしています」との言葉で締めたい。

注釈

惣・・・中世日本における百姓の自治的・地縁的結合による共同組織（村落形態）を指す。

惣村ともいう

樋・・・「とゆ」のことで、水門から導水する部分を指す。